

クーハンからの転落事故



沖縄県立中部病院小児科  
小濱 守安

クーハンとはフランス語で、取っ手の付いた大きな柔らかい手編みのかごのことであり、ベビーキャリーまたはキャリーバッグなどとも呼ばれる。我が家にも長男が生まれた時、友人より頂いたが使い勝手が悪くいつの間になくなってしまった。首のすわらない小さな赤ちゃんを連れて外出する際に用いられているようであるが、クーハンの使用に関連した事故が散見される。本来、中世フランスでは農作業の間、かごの中に赤ん坊を入れて寝かしていた様である。日本でも数十年前までは田植え時や刈り入れ時の農村では藁で分厚く編んだおひつ入れのような器（つぐらまたは、えじこともいう）の中に赤ちゃんを寝かせていたという<sup>1)</sup>。中世ヨーロッパではゆりかごとかごはほぼ同義と考えられていたようで、かごには赤ちゃんを固定するひもを通すための穴があいていた。ヴィクトリア時代には、生後間もない赤ん坊を入れる藤で編まれたほろ付きバスケットは携帯用ベッドであり、当時の雑誌には「持ち運びに便利で、テーブルやソファ、ベッドの上にも置くことができ、乗り物にも持ち込むことができ、さらに

ひざの上にも不都合なく置くことができる」と紹介されている<sup>2)</sup>。アメリカではもっと手の込んだ作りの「藤製で、しっかりした脚が付いていて日よけが付けられる型の保育器」が好まれ、かごの外側は幾重にも重ねられたスカート状の布で覆われ、リボンやひも飾り、レース、ひだ飾りで装飾が施されていた。もはや携帯用ベッドではなく、生まれたばかりの赤ん坊を友人や家族に見せるための、手の込んだ作りの披露用の乗り物であった<sup>2)</sup>。1980年代のフランスの育児書では、Couffin（クーハン）という名前前で赤ちゃんを入れて運ぶものとして、車の中では後部座席にクーハンを背もたれと平行において中に赤ちゃんを入れ、そばに母親がすわりかごを支えなさいという記載がみられる。日本ではまさに赤ちゃんを運ぶ道具として、レースの飾りのついたほろの付いたかわいいクーハンを「寝ている赤ちゃんをそっと運べます」と宣伝している。1999年の国民生活センター報告によれば7年間に44件の事故があり、頭蓋骨骨折が7件であったという。著者らの施設でもクーハン使用に関連した事故23例を経験した。頭蓋骨骨折6例、環軸椎亜脱臼1例、鼻出血3例、擦過傷・裂傷3例であり6例が入院となった。いずれもクーハンを使用していなければ防ぎえた事故である。受傷機転は（1）赤ん坊をかごに入れて移動している時に手が外れ落としたものが10例、（2）クーハンに赤ちゃんを入れ座席に寝かせていて、交通事故や急ブレーキにより車内へ落ちたもの4例、（3）車の乗降時にクーハンが引っかかり落としたもの4例、（4）クーハンに子供を入れたままテーブルの上におき、落ちたもの4例、（5）手がすべりクーハンごと落としたもの1例であった。症例を紹介する

**症例 1：**母親がクーハンに生後2か月の赤ちゃんを入れて外出した。帰宅後クーハンの中で寝ていたのを、食卓テーブルの上に置いて家事を始めた。2歳の兄が赤ちゃんを見ようとクーハンを引っ張り床に落としてしまった。兄の後頭部が腫脹し、頭頂骨骨折で入院となった。

**症例 2：**7ヶ月の男児。助手席でクーハンの取

っ手にシートベルトを通してクーハンを固定していた。居眠り運転で追突事故を起こした。衝突の勢いで、児はかごから飛び出しダッシュボードにぶつかり、床に落ちた。口唇裂傷、鼻出血を認めた。

**症例 3：**生後5ヶ月の男児。後部座席でクーハンの中に寝かせていた。車から降りる時に、クーハンが車のドアにぶつかり、持ち手が一部外れ、クーハンが傾き児が約50cm下の路上に転落した。右頭頂骨に陥没骨折を認めた。

**症例 4：**産科退院時に、クーハンに寝かせた新生児を母親が祖母に渡そうとした時にクーハンを持っていた手が滑り、新生児が床に落ち頭蓋骨を骨折した。

クーハンの取扱説明書には、生後4ヶ月未満の乳児を乗せて持ち運ぶことを目的とした手さげ式のものであり、首がすわった乳児や、寝返りができる乳児には使用しないこと、自動車による移動用には使用しないこととなっている。事故に遭遇した症例の多くは、その取り扱いに問題があると思われた。古来日本では生後100日のお宮参りまで新生児の外出は控えられていた。生後100日にもなると乳児は首も坐り抱っこをしていても安定感がある時期となる。首のしっかりしていない乳児は不要不急の外出は控えるのがよい。やむなく外出する場合、保護者の腕の中で抱っこされた状態で保護するのが一番安全である。車中では後部座席で後ろ向きに装着されたチャイルドシートの中で固定され保護されるべきである。

赤ちゃんを連れて出かけるときかごに入れてバッグのようにぶら下げて移動することは、危険である。「かご」感覚で不用意に気軽に扱ってしまい、中には我が子がいる事を忘れてしまう。母親もクーハンの中に哺乳ビンやおむつ、

着替え、母親の持ち物などを入れている場合もある。実際赤ちゃんが入ったクーハンを前後に振り、赤ちゃんを落とした例や、トートバッグのように肩にかけてずり落ちてしまった例もある。赤ちゃんをつれて移動している時につまづき転びそうになったとき、ほとんどの親は抱っこをしていれば我が身が傷ついても、こどもを守ろうとする。しかしクーハンに入れて移動している時に、つまづき転びそうになったときに瞬間的にクーハンの中の子どもを守れるという行動がとれるだろうか。多くは我が身を守るため手にもっているクーハンを離してしまうのではないだろうか。クーハンに赤ちゃんを入れると相当の重量となることから、父親が持つことが多いと思われる。父親へもクーハンの危険性を周知徹底させることも必要である。乳児早期から使用できるチャイルドシートの中には赤ちゃんを寝かせたままクーハンのように取り外してクーハンのように運べる機種もあり、外来受診時にチャイルドシートごと連れてくる親もいる。繰り返すが歩いて移動するときは抱っこが一番安全である。クーハンの取扱説明書によると使用できる期間は首がすわるまでのほんの数ヶ月である。事故の発症機転や赤ん坊に対するスキンシップの点からもクーハンの使用は差し控えるべきであると考えられる。

**参考文献**

- 1) 上笙一郎：子育てどころと知恵一今とむかしー。赤ちゃんとママ社、2000
- 2) 田甫桂三監訳：子どもの時代。学文社、1996.
- 3) 市川光太郎：新生児・乳児早期の転落事故。ペリネイタルケア2000；19：378-382.
- 4) 岩永知久、藤本保：キャリーバッグ（クーハン）からの転落事故。小児科；44：181-188.